授）や，研究を始めておられる方もあることが分かった。

1987年4月には，香港大学で開催された“Symposium on Social Values and Development of the Third World Countries”に招かれて，“The role of belief-value systems related to child-rearing and education : The case of early modern to modern Japan.”という論文を発表した。これは来年に Sage から現れる本 *(Social values and the development of third world countries : The Asian perspectives)* ［仮題］の中の1つの章となる。

同年7月に東京で開かれたＩＳＳＢＤ（国際行動発達学会）第9回大会では2つの発表をした。1つは“Life-span development of social relationships”(Chair : Michael Lewis) において“Sibling and peer relations in early childhood”という題目で，これまでのわれわれの共同研究の結果をもとにした理論的提起をした。これも将来，論文にまとめたいと思っている。もう1つは，ポスター・セッションに出したもの（青井教子と共同）で，昨年にこの欄で述べたわれわれの方法，ＬＣＳ－Ｄを用いた研究である：“How do people represent their life course in retropsect and prospect？”これはサンプル数の少ない年齢群のデータを補充したうえで，論文にまとめる予定である。なお，この大会の前後に教室を訪れた4人の外国の研究者の参加を得て，講演やコロキアムを開催したり，共同研究の打ち合わせをした。

［児童発達観の研究］　上記の明治初期の翻訳育児書の研究も，児童発達観の歴史的研究の中に入る。そして，昨年から発表を始めた桑柏日記の分析の後半部が，この巻に掲載されている。そこにも記したように，それは筆者の分析の視点の大枠を提示したものであり，今後さらにこの日記に取り組んで行くつもりである。いろいろの情報を提供してくださった渡部家の子孫の方々に心から感謝したい。

筆者がこれまで子どもの発達と家族生活の領域で，アマチュア歴史研究をしてきたのには，その問題に関する筆者の本質的興味に加えて，もう1つの狙いがある。それは，「発達に関心をもつ歴史家」と「歴史に関心のある発達研究者」とによるわが国での共同研究への準備である。そのための1つの道として筆者が考えているのは，われわれもアマチュア的でよいから史料に取り組んで，その視点から分析する意味を他の領域の研究者に問うことと，心理学研究者の歴史研究に対する潜在的興味を掘り起こすことである。筆者のこれまでの仕事が，この目標への接近に何かの寄与をしたかどうかの評価は，別に客観的になされる必要がある。また，目標の後半部に関しては，今秋の日本教育心理学会第29回総会（10月，東京）で，桑柏日記を読んだ経験をもとに発表する。

［家族関係など］　家族関係インヴェントリーの研究論文（小児科学の研究者との共著）が現れた（小児科，1986，**27**，1327-1335)。また，「親に対する子どもに認知像の検査法――ＣＣＰ解説――」の改訂版も現れた（林・一谷・小嶋，1987，大成出版牧野書房)。

その他，以前に予告しておいた論文，“Becoming nurturant in Japan : Past and present”(in A. Fogel & G. F. Melson (Eds.), *Origins of nurturance.* ＬＥＡ，1986）が出ているほか，「家庭と学校」の章（永田（編），朝倉書店，1987）；「家庭における対人関係」の章（大橋・長田（編），有斐閣，1987）などが現れ，「誕生からの3年間」の章（久世ほか著，有斐閣，1987）も間もなく現れる。

（1987年8月18日）

研　究　経　過　報　告――昭和61年度

田　畑　　治

1．カウンセリング過程の研究

この領域では1つの論文をまとめることができた。近年，外国文献では，心理療法に小動物（ペット）を媒介にさせた取り組みが発表されてきていることが散見されている。わが国でも，最近ちらほら発表されはじめている。筆者の研究では，心理療法やカウンセリングの過程で，クライエントが偶然に話題として言及したことに，さりげなく注目していくなかで，小動物が非常に重要な役割を演じ，ひいてはクライエントおよびその家族の問題――親離れ・子離れ――が促進されたり，解決されたりすることを，2つの母親面接の事例をもとにまとめたものである。「心理療法における小動物のテーマの治療

的意義――子の親離れ・親の子離れに媒介となるケースをめぐって」（名古屋大学教育学部紀要――教育心理学科――，第33巻，303-313頁，昭和61年12月）がそれである。

今後も，この問題意識のもとに続報を構想し，すでにカウンセリング・心理療法が終結しているものをもとにまとめたいと予定している。また小動物（ペット）は主に，イヌ・ネコであるが，それ以外に家禽類（たとえばチャボ）に言及されることもあることを指摘しておきたい。

つぎにカウンセリングの方法論に関してまとめたものに，以下の3点および書評1点がある。「カウンセリングにおける人格の変容」（詫摩武俊監修，鈴木乙史・清水弘司・松井豊編『2．性格の社会化――パッケージ性格の心理・全6巻』ブレーン出版，17-36頁，昭和61年4月），「人格と臨床」（2～5節）（八重島建二らと共著『現代心理学』培風館，236-258頁，昭和61年11月）および「カウンセリングの方法」（4．相談方法Ⅰの⑤担任による教育相談の手引）『教育心理』第34巻臨時増刊号，84-87頁，昭和61年10月）である。

書評として「アイビィ著，福原真知子・椙山喜代子・国分久子・榆木満生訳編『マイクロカウンセリング』川島書店，1985年11月刊」（季刊精神療法第12巻第3号，304-305頁，昭和61年7月）がある。マイクロカウンセリングとは，さまざまな心理療法，各種面接（診断面接，人事面接，伝統的教育など）に共通にみられる技法を基本的かかわり技法，積極技法に分け，それらを学び，教えるための“心理－発達－教育モデル”を志向したものである。臨床家の，各自の心理面接の特徴と短所（弱点）を点検するための好書であるといえる。

2．心理臨床家の養成，教育・訓練の問題

この領域は，他人が取り組んだ事例研究に対してコメントをすることで，その人を援助し，育てていくこととコメンターとしての自分の心理臨床の態度や技法を見つめなおす絶好の機会となることである。昭和61年度は，5名からのコメントを求められた。「吉末論文へのコメント」（『臨床心理事例研究――京都大学教育学部心理教育相談室紀要』第13号，170-174頁，昭和61年10月），「松井論文へのコメント」（『東京大学教育学部心理教育相談室紀要』第9集，71-74頁，昭和62年3月）の公刊コメントである。

学会等での口頭コメントとしては，蓮見将敏氏（東京都教職員相談室）「思春期に激しい混乱症状を呈した女生徒への治療」と高野英子氏（狭山博愛病院）「心を閉ざしたまま，この世を去った老人の事例」（いずれも日本心理臨床学会第5回大会，大阪府立大学，昭和61年8月）がある。筆者自身，父親を病気で亡くして間もない時期でもあり，高野氏の心理臨床家としての心暖まる取り組みに頭が下がる思いがしたことと，生から死への“ターミナル・ケア”の問題は，高齢化社会に入ってきたわが国の現状から，今後ますます実践研究がなされる必要性があることを痛感した次第である。もう1つは，下山晴彦氏（東京大学）「離人症の青年の浪人から大学卒業まで――大きな箱庭としての大学4年間の意味」（第20回全国学生相談研究会議，香川大学，昭和62年1月；同報告書，104-106頁，昭和62年4月）である。

3．臨床青年心理学，学生相談，エンカウンター・グループなどへの接近。

この領域では，2つのまとめがなされた。1つは，本学学生相談室の主催による自己発見のためのグループ合宿に関するものである。「学生グループ十年目を振り返って――中津川でのグループ体験」（昭和61年度厚生補導特別企画『第10回自己発見のための合宿セミナー』名古屋大学学生相談室，23-25頁，昭和62年3月）である。10年間連続してファシリテーターとして参加し，約300余時間を学生グループの中に心身を浸し，気づいたり，学んだり，発見したり，体験したりしたことは，筆者自身にとっても感慨深いものがある。その都度，感想文には綴ってきたが，いつの日にか一本化したものにまとめたいと念じている。

もう1つは「集団心理療法」（第11章「治療集団の技法と実際例Ⅱ.）永田良昭・佐々木薫編『集団行動の心理学』有斐閣，328-337頁，昭和62年1月）がある。これは，看護婦グループであるが，女性の成人集団のすごいエネルギーともろの感情のすさまじさに，筆者は熱発した苦い体験もしたものである。学生（青年）の集団とはかなり異質の気がしている。今後，これらも集団ごとのヨコの比較もしたものをまとめたいと念じている。

4．教育臨床，教育的人間関係の研究

この領域では依頼されてではあるが，以下の2つがある。

1つは「子どもの自己主張が受けとめられる教師」（『児童心理』9月号　特集：自己主張する子・しない子，第40巻第10号，29-35頁，昭和61年9月）である。もう1つは学会シンポジウムでの発題「職業と人間――その今日的課題――臨床心理学の側面から」（東海心理学会第35回大会発表論文抄録集（愛知工業大学），78頁，昭和61年6月）である。

（昭和62年8月27日記）